

バスキュラーアクセス（VA）インターベーション（PTA）における超音波検査（US）の有用性

長崎腎病院

○内野拓寿，飯野八朗，田川秀明，李 嘉明，原田孝司，船越 哲

【背景】

近年、BAG診断において逆行性血管造影（BAG）に加えてVA検査にドップラー超音波（US）が汎用されるようになり、PTAの事前診断・効果判定への応用が期待される。

【目的】

PTAの前後にBAGとUS両者を施行し得た30例において、狭窄部位の同定とPTAによる拡張の確認の相補性を検討する。

【対象・方法】

PTAの前後にBAGとUS両者を施行し得た30例について、狭窄部位の同定とPTAによる拡張の確認の相補性を調査した。

【結果】

BAGで局所診断できずUSで診断可能であったPTA適応の狭窄は30例中6例9カ所であった（腋か・鎖骨下静脈を除く）。また、PTA時に拡張と判断した部位でUSでは拡張不十分であった部位は8例10カ所であった。

【考案】

BAGで発見できなかった狭窄部位の同定がUSで10%可能であった。また、PTA時に完全拡張と判断した部位での拡張不十分が術後に20%であった。VAのUSは習熟すれば短期間での施行可能で、できれば両者の併用が望ましいと思われた。